

## 所長就任にあたって

町田章前所長を引き継いで、4月1日から大任を仰せつかることとなりました。町田前所長の6年間は、独立行政法人化という奈文研50年の歴史のなかでも経験したことのない難しい時期であったと思います。この時期に陣頭指揮に当たられ、独法奈文研の基礎を築かれた町田前所長の御労苦とご努力にあらためて感謝申し上げます。



田辺征夫所長

さて、これまでが第1段階の改革とすれば、現在は、平成18年度からはじまる第2期中期計画に向けての第2段階です。今、4年間の成果と実績に基づき、事業と組織のさらなる効率化を目指しての見直しが課題となってきました。

この機会に、奈文研50年の実績を総括しながら、社会情勢の変化のなかで、今日、奈文研に求められているものが何かをあらためて考え、国民・社会の要望にこたえることのできる奈文研のあり方と、それにふさわしい組織をつくる必要があると考えています。

取り組まなければならない事業・研究上の課題のいくつかとして以下のようなものがあげられます。

- 1．南都諸大寺の総合研究のあり方の再検討。たとえば、東文研と一緒にした利点を活かす研究。
- 2．全国埋蔵文化財行政に対する研修等の指導的な役割の変化。全国で7000人に近い調査員が活躍する現状での役割をどう見直すかという問題。
- 3．都城発掘の位置づけと整備活用への対応。平城宮跡が世界遺産に登録され、保存が確立した段階で

今後の発掘をどう位置づけ、また、宮跡の整備活用においてどのような役割を果たすか。そして、いまだ未解決の部分の多い飛鳥や藤原宮跡の発掘と整備活用の進め方。

4．東文研とともに文化財保護研究の情報センターとしての役割をどのように果たしていくか。

5．国際的な文化財保護支援に対応し、国際共同研究を統合的に進めること。

以上のどれもが組織としては大きな課題ですが、研究テーマという面から考えると、これまででない楽しみもたくさん出てきたともいえます。

その一例が、東アジアを中心にした国際的な視野での研究と言うことです。この10年間ほどの間に日中、日韓の共同研究が定着したことにより、新たな土壌ができています。ただ、戦乱による被害を受けた国々への文化財保護支援という国の政策との整合性も新たな課題として浮上してきました。国際支援の観点から言えば、多くのアジアの国が奈文研を一つの手本として強く意識していることも忘れてはいけないと思います。

いずれにしても、こうした新しいテーマにも積極的に取り組むことで、より活気ある研究所にしていくチャンスでもあると思います。

このように、独法の定着する中で、新たな課題や組織的対応が求められていますが、奈良の豊かな文化財を中心に実物に即した研究をおこない、日本の文化財保護に資する、という奈文研本来の性格と役割は変わりません。むしろその役割をさらに広い視野のもとに発展させることが求められていると考えております。

今後とも、これまで以上に皆様方のご支援を賜りますことをお願いいたします。

(所長 田辺 征夫)

## 発掘調査の概要

### 高松塚古墳の調査(飛鳥藤原第137次)

- 発掘された地震痕跡 -

平成16年10月に開始した今回の調査も3月末日をもって調査を終了となりました。調査は墳丘保護のために建設した仮設覆屋の内部と、丘陵の開削状況調べるため設定した未指定地(墳丘北側・西側)の調査区に分けて実施しました。覆屋は雨や風を防いでくれる反面、写真撮影の際に影むらが生じたり支柱が邪魔になるなど多くの苦勞を伴いました。

地震によるひび割れは現地説明会後の断割調査時に見つかりました。上部から竹の根が入り込んでいたため、当初はただの根穴であろうと判断しましたが、詳細に観察したところ部分的に版築のズレを確認でき、地震痕跡の可能性が浮上しました。ズレは大きいところで2～3cmほどあり、これらは昨今世間の話題になっている南海・東南海地震によるものと考えられます。地震の規模はおおよそマグニチュード8.0～8.6で、このような地震は約90年～150年周期で定期的に発生するといわれています。今回見つか



断割トレンチ西壁に見える地震痕跡

った地震痕跡がいつ頃の地震によるものかはさだかではありませんが、今回の調査区内でも20ヵ所以上で確認され、墳丘は相当損傷を受けていると推定されます。また、今回の調査により以前の調査で見つけていた墓道部の溝状遺構(土層の陥没部分)も地震による断層の可能性が高まりました。こういった地震による断層や地滑りは、奈良県下では天理市の黒塚古墳や明日香村の酒船石遺跡さかふねいしなどにもみることができ、これらはこの地域を繰り返し襲った南海・東南海地震によるものと考えられています。

2月27日には現地説明会が開催されました。当日は春の陽気を感じさせる快晴となり、全国各地からおよそ2000人を超える考古学ファンが現地を訪れ、調査員の説明に耳を傾けました。説明会は橿原考古学研究所や明日香村の協力もあり、大きな混乱もなく無事終わることができました。説明終了後には熱心に調査員に質問する方々も多く見られ、改めて高松塚古墳に対する世間の関心の高さが窺われました。高松塚古墳をめぐるのは、現在、新聞各紙で取り上げられているように国宝である極彩色壁画の恒久保存対策に向けた検討会がおこなわれています。保存科学や生物、修復などのあらゆる方面の専門家が最善の方策を検討しており、保存方針の決定の行方が注目されます。

今回の発掘調査により、古墳をとりまく環境や墳丘の規模を明らかにすることができました。この調査成果が今後の墳丘の再整備や壁画保存対策の重要な基礎資料となるでしょう。国民の宝である明日香美人のほほえみを後世に残すことが私たちに課せられた責務といえるでしょう。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 渡部 圭一郎)



現地説明会風景

### 平城宮中央区朝堂院の調査(平城第389次)

中央区朝堂院朝庭部分における3回目の調査です。過去2回の調査では、この場所で掘立柱の建物跡群を発見し、天平神護元年(765)11月称徳天皇の大嘗祭にともなう大嘗宮の遺構と推定しました。今回の発掘調査は、大嘗宮の附属施設である廻立殿の全貌を明らかにすることを主な目的として、2005年3月29日より開始しました。調査面積は約1700㎡です。

中央区朝堂院は、第一次大極殿の南に位置する、平城宮の中心的な施設のひとつです。堀で囲まれた長方形の朝堂院の区画には、朝堂と呼ばれる南北に長い建物が東西対称に建ち並んでいます。

建物に囲まれた空間は官人達が列立する広場で、ここを朝庭と呼びます。ここでは、毎年の元日の朝賀や、外国使節に対する饗宴がおこなわれ、奈良時代を通じて使用されたと考えられています。

ところで大嘗祭とは、天皇が即位の後、初めて新穀を神に供え、神とともにこれを食する儀式です。その時に用いる仮設の建物群が大嘗宮で、過去2回の調査(平城第367次・376次)では、称徳天皇の大嘗宮悠紀院の全貌が明らかになりました。また、これは、平安時代の書物『儀式』(872~877年頃成立)の記載から復原される大嘗宮の規模・構造にほぼ一致するという、驚くべきものでした。

しかし、成果とともに課題も残されました。それは、大嘗宮の北側に位置する廻立殿についてです。廻立殿は、大嘗祭の儀式の間、天皇が湯を浴びて身体を禊ぎ清め、御在所となる建物です。過去の調査では、大嘗宮の北側、廻立殿相当の位置で、桁行5間・梁行4間の規模に復原される大型建物が検出されました。しかし、『儀式』に記されている廻立殿は、

桁行5間・梁行2間と、規模がそれよりも小さいのです。大嘗宮の建物群に関しては規模がほぼ一致したにもかかわらず、廻立殿のみ規模が大きく異なるのはなぜなのでしょう。果たして、この建物を廻立殿と考えて良いのでしょうか。

他にも課題はあります。過去の調査では、同じく中央区朝堂院の朝庭に、大嘗宮の建物よりも新しい、整然とした配置を持つ掘立柱建物群の存在が明らかになっています。それらは中央区朝堂院の中軸上に展開し、重要な役割を果たしていたことが推測されますが、性格や全貌はまだ十分に解明されていません。また、廻立殿相当とした建物を、この建物群と関連づけて再考する必要も出てきています。

今回は、これらの課題を解明するため、廻立殿相当の建物を含む範囲と、それに続く北側に調査区を設けました。そして、廻立殿相当の建物がさらに北に延びるか否かとともに、周辺に関連する建物や区画施設などが存在したかを明らかにしていきたいと思えます。

5月20日現在の状況としては、調査区の広い範囲に礫が敷きつめられた状態を確認しています。この礫敷きは、過去の調査によって、朝堂院朝庭部の舗装に由来するものと考えられています。そのため、廻立殿相当建物の柱穴や他の遺構との関係がどのようであるかを確認しながら、慎重に調査を進めています。

調査地付近のクローバー畑で、次々とかえり始めるヒバリの雛たちが大空高く舞う頃には、廻立殿の「謎」が解け始めていることでしょう。

(平城宮跡発掘調査部 中川 あや)



調査区全景(北から朱雀門を望む)



礫敷きの様子(東南から)

### 意外と黒い平城宮第一次大極殿の瓦

私たちが瓦の色をイメージするとき、まず頭に浮かぶのは「いぶし銀」といった光沢のある色合いでしょう。ところが、第一次大極殿に葺かれていた瓦を見ますと、「いぶし銀」ではなく、意外と黒みがかった色合いであったことがわかります。しかも、平城宮の中でも、どういうわけか第一次大極殿の瓦だけが黒かったようです。

ではなぜ第一次大極殿の瓦が黒かったのかを調べてみますと、どうやら中国からの影響があるようです。唐の長安城にある大明宮では、「青棍瓦<sup>せいこん</sup>」という黒い瓦が用いられていたことが文献に記されています。おそらく、遣唐使が大明宮を訪れた際に、黒い瓦が葺かれた重厚な雰囲気<sup>せうこうな</sup>の建物に感銘を受け、帰国してから第一次大極殿にも黒い瓦を葺くように進言したのではないのでしょうか。

現在、復原される第一次大極殿の瓦の設計がおこなわれていますが、できるだけ当時の状況に近づけるため、瓦も黒みをもたせるよう、試行錯誤を繰り返しています。完成した際には、朱雀門のような「いぶし銀」の屋根とは異なる、威圧的な黒い屋根が、大極殿によりいっそうの風格を与えることでしょう。(軒丸瓦の実物は直径15.9cm)

(平城宮跡発掘調査部 林 正憲)





## 研究室紹介

### 写真資料調査室

平城宮跡発掘調査部に属する写真資料調査室は、2001年4月の法人化と同時に新設された、写真業務全般をおこなう調査室です。もっとも業務量の多い平城宮跡発掘調査部に身をおいていますが、仕事の内容は非常に多岐にわたり研究所に関する視覚的な部分全般を受け持っています。

法人化以前、研究所での写真撮影や処理は、定員職員を3名確保しているにも関わらず独立した部署がなく、機構替えのたびに写真関係室の設置を要求し続けて参りました。これもひとえに文化財調査の中で写真の重要性を訴え続けてきた先人たちのおかげです。

さて、我が調査室の内容です。メンバーは飛鳥藤原宮跡に併任として配属されている1名を含んで定員職員3名。室長は平城宮跡発掘調査部長が併任しています。常勤職員以外では暗室処理をはじめ写真処理全般のサポートをいただいている整理作業員が平城・飛鳥藤原両調査部に各1名の2名。データベースをはじめとする写真の利用を目的として、撮影した写真のPro-PhotoCD入力を担当するために文化財情報研究室から来ていただいている派遣職員1名および、サポートメンバーとして写真業務全般を業務委託している1名の合計7名体制で業務をこなしています。

日々のお仕事はといいますと、先述のように最も重要で多量の業務が発掘調査での記録写真撮影です。文化財発掘調査においては後世の検証が困難であり、遺構の性格を把握するための客観的資料である発掘調査記録写真は、それ自身が「文化財」としての役割を持っています。調査で出土した資料や発掘調査以外では文化財建造物・古文書などの史料をそれぞれ適切な方法で撮影し、カラー・モノクローム写真処理をおこなっています。これらの写真資料フィルムは利用頻度が高く、使用することによる媒体自体の劣化が懸念されるため順次デジタル化し、デジタルデータを利用することによりフィルムの安定保管をおこなっています。

そのほかの業務としては、地方自治体への撮影指導や奈文研発掘調査技術者研修の写真研修などによる文化財写真の意義・必要性・重要性などを広める役

割も担っています。最近では、朱雀像が確認されたことで有名なキトラ古墳の画像調査や、ドイツでおこなわれた日本考古学展の展示図録用写真を全国的に撮影して回るなど調査室総力を挙げた仕事も増加してきています。

また、我が調査室では撮影技術の向上とともに写真資料の将来性について常に考えています。全国的にデジタル時代の波に流されて「安・軽・薄」にデジタル技術を使用する動きが広まっています。デジタルデータは媒体・データ形式の恒常性が低く、内容の信頼性を確立することも困難なため、決して安易にデジタル化を進めるべきではありません。文化財写真資料のために最も良いデジタル技術の利用方法を常に考えて日々業務を遂行しています。

(平城宮跡発掘調査部 中村 一郎)



恒温恒湿に空調されたフィルム保管室



発掘調査では高所からの撮影も要求される

## 国際共同発掘調査

### 唐長安城大明宮太液池

中国社会科学院考古研究所との共同による太液池<sup>たいえきち</sup>の発掘調査は平成13年度より開始し、今年が最終年度となります。春の発掘期間中には7名の所員が調査に参加し、大きな成果をあげました。去る5月17日には発掘現場にて日中両国の記者に対して説明会をおこない、翌日、日本の新聞でも報道されました。

太液池は唐長安城大明宮の北半中央に位置します。池の規模は東西484m、南北は310mあります。両研究所は過去4年の調査で、池の西岸、北岸、池中の島、池南側の丘陵上を発掘してきました。

4次にわたる調査では多くの遺構を検出しています。池岸は版築で造営され、汀には木杭<sup>みぎわ</sup>の護岸や庭石がありました。岸沿いには道路や回廊状の建物がめぐり、池に臨む建物、排水施設や井戸なども検出しました。池中にたつ蓬莱島の南側には、石組の貯水池や蛇行する水路、東屋、庭石が配置され、州浜<sup>すはま</sup>状の遺構もみつかりました。池南側の丘陵上では、回廊と中庭からなる建物群がみつかり、象や灯籠の石製彫刻が出土しています。

今年度は池の南岸に調査区を設定しました。発掘総面積は約2800㎡です。2月から作業を開始し、5月末に終了しました。発掘の結果、池岸から池中に張り出す釣殿<sup>つりどの</sup>状の建物、磚を積み上げてつくった護岸施設、池岸をめぐる道路、雨水などを集めて池に流し込む排水溝などが検出されました。

宮城内に位置する池の全貌を明らかにしたのは、中国でも初めてです。日本や朝鮮半島の古代庭園研究において、ひとつの指針を示すものといえるでしょう。  
(平城宮跡発掘調査部 今井 晃樹)



太液池での発掘調査風景

## 公開講演会(平成17年5月21日開催)

### 「考古学すんわ - 発掘お国柄事情 - 」

田辺所長より、欧米と日本の発掘方法の違いについて種々の事例についてエピソードをまじえた興味あふれるお話を紹介しました。

### 「東アジアの古代苑地」

7・8世紀代の東アジア諸国の苑池遺跡を概観しました。唐では、生産や軍事などの機能をも担う広大な苑にともなう苑池と、宮内にあり皇帝の私的な生活空間で、政治、儀式、信仰、遊興等の機能をもった比較的中・小型の苑の苑池の2種が組み合い、皇帝の権力を維持し、顕示する仕組みとして有効に機能していました。大明宮太液池は後者の典型例で、上陽宮園林遺跡の苑池は、後者の中でも、もっぱら鑑賞や遊興に使われた、より私的空間的色彩が強いものでしょう。新羅・雁鴨池、渤海・上京龍泉苑池、飛鳥京、平城宮苑池などでは、機能、設置位置、付施設などに、唐の強い影響を看取できます。なお、日本の苑池は、天武・持統朝に唐の影響下に萌芽し、奈良時代に確立したものと考えられます。

(飛鳥資料館 加藤 真二)

### 「上咋麻呂の悔」

「正倉院文書」に、「上咋麻呂<sup>かみのくい まろ</sup>」なる人物の書いた、非常に興味深い2通の手紙があります。1通は、官職につけるよう力添えをしてほしい、もう1通は鰯を贈るので受け取ってほしい、というものです。

現在、咋麻呂の2通の手紙は別の巻物に収まっていますが、近年の研究で、もとは一巻の巻物に張り継がれていたことが明らかにされています。

正倉院文書の多くは、造東大寺司写経所という役所の帳簿類で、様々な文書を反故紙として再利用しています。咋麻呂の2通の手紙も反故として帳簿に利用されたことが判明しています。

以上から次のことがわかります。宝亀3年(772)10月23日の晩から翌日に人事があるという情報を得た咋麻呂が、親類のコネを頼りに上馬養<sup>かみのつま かい</sup>(写経所でそれなりの地位にあります)に1通目の手紙を出します。しかし人事はなく、咋麻呂は28日には鰯を贈りますが、馬養には「不用」と突っ返されてしまいます。噂に右往左往しつつ、必死に官職を求める咋麻呂を哀れむのか、共感するのか、さて・・・。

(平城宮跡発掘調査部 馬場 基)

## 飛鳥資料館のみどころ (9)

### 展示品解説 その1

#### 「石人像」

亀石など石造物のレプリカが展示してある庭を通りぬけ、飛鳥資料館の建物に入ると、まず出迎えてくれるのが、玄関ホールに展示してある石人像(重要文化財)です。

明治36年(1903)に、飛鳥寺(安居院)の北西の水田(現在の石神遺跡)から出土した、高さ約1.7mの石造物です。

等身大の老人男性が衣服を着て岩に腰掛け、その横に老人女性が男性の袖にそっと手を添えています。女性はスカートをはき、筒袖の上衣を着ています。特に、足のくるぶしなどの細部が細やかに表現されています。現在は欠損している男性のもつ盃と女性の口には、像の底からつながる直径約2cmの孔が開けられています。おそらくは噴水として用いられたのだらうと考えられています。

石人像が出土した石神遺跡は、その後の発掘調査によって、飛鳥時代の迎賓館と想定されています。噴水である石人像は、その迎賓館において遠来の客を迎えた、饗宴の場でのデコレーションだ

ったのでしょうか。その様子は、当資料館の庭に展示してある復原された石人像でみていただけるかと思えます。

電動工具の無い飛鳥時代に、硬い花崗岩にどのようにして直径約2cmの孔を貫通させたのか、古代人の技術力の高さを肌で感じることができる逸品です。(飛鳥資料館 西山 和宏)



石人像

## 記 録

### 埋蔵文化財センター研修

保存科学課程専門研修

平成17年5月12日～5月26日 7名

文化財写真課程専門研修

平成17年6月1日～6月24日 6名

### 講演会(NPO平城宮跡サポートネットワークと共催)

平成17年5月15日(日)午後3時30分～

於:平城宮跡資料館講堂

「高松塚古墳と平城京」

白石太一郎 教授(奈良大学)

### 公開講演会

平成17年5月21日(土)午後1時30分～

於:平城宮跡資料館講堂

「考古学すんわ - 発掘お国柄事情 - 」

田辺 征夫 所長

「東アジアの古代苑池」

加藤 真二 飛鳥資料館主任研究官

「上咋麻呂の悔」

馬場 基 平城宮跡発掘調査部研究員

### 春期特別展示

平成17年4月16日(土)～5月29日(日)

於:飛鳥資料館

「飛鳥の奥津城

- キトラ・カラト・マルコ・高松塚 - 」

## お知らせ

### 飛鳥資料館夏期企画展

展示

平成17年8月2日(火)～8月31日(水)

「古墳を飾る - 音乗谷古墳の埴輪 - 」

特別講演会

平成17年8月6日(土)午後2時～

於:飛鳥資料館講堂

「何のために埴輪を並べたのか」

高橋克壽 平城宮跡発掘調査部主任研究官

### 発掘調査現場に説明板を設置

平城宮跡発掘調査部では、現在調査中の中央区朝堂院の発掘現場(第389次調査)に、調査の状況をわかりやすくまとめた説明板を設けました。

場所は現場フェンスの北東寄りです。

お立ち寄りの際は、ぜひともご覧ください。



発掘現場の説明板

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2005年6月